

文字について

吉池孝一

一

文字は外形と用法よりなる。複数の外形と用法が一体となって始めて文字としてはたらく。ある人はこれを文字組織とよんだ。文字組織は言葉音をにない空間と時間を越える。

二

文字組織は言葉音を運ぶ乗り物といえよう。この乗り物は、人によって作られ、人によって展開され、そして人による使用が途絶え、ついには死文字となる。

三

民族や国家に興亡の歴史があるように、人と共にある文字組織も興亡という過程から逃れることはできない。興亡の過程には長いものと短いものがある。興亡の過程にあっては変わらぬものと変わるものがある。

四

変わらぬものは慣用の力による。インド系文字の a 母音は表記されずに二千三百年が過ぎたし、長いあいだ漢字漢文に句読は施されなかった。不便このうえなく見えるものも慣用の力により永らえる。

五

変わるものには小さいものと大きいものがある。小さいものは欲求による。らくに書きたい、明瞭に書きたい、おもしろく書きたいなど。大きいものは他者による。異なる民族が持つ慣用との接触による。

六

言葉音の変化は人知れず浸透するが、文字の変化は意識にのぼる。文字組織は、慣用によって保持され、欲求によって改められ、接触により創り変えられる。

七

異なる慣用との接触は新たな慣用の芽をはぐくむ。楔形文字であろうと甲骨文字であろうといかなる文字組織であろうと接触の賜物であるとの予感を生む。